

## 第三百六回 青葉会

平成二十三年九月二十二日(木) 午後六時〜九時  
丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子  
豊田ゆたか 中野一灯 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介(新人) 朱牟田恵洲 土谷堂哉  
福島正明 古田昇 南平和夫 宮内規雄 渡邊盛雄

紙上選句

赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 村田くに子  
山崎青史

ゴシックは選者の天

《選者吟》

颯風やお猪口傘飛ぶ交差点

万里子(猛・龍・二)

閑けさや豪雨の後の虫時雨

全 (猛・龍)

池の端に稲穂色づく深大寺

全 (二)

手料理に応用効かせ涼新た

全

新涼のカリヨン歌ふ「あそびましょ」

全

《互選句》

九点 ☆放ち馬嘶く馬柵(ませ)の霧しづく

(青…手練の句と見た。霧しづくがいい) (下北半島)

一灯 (万・清・恭・弧・敏・ゆ・允・く・青)

七点

塩加減決める指先子芋煮る

堂哉 (猛・五・隆・く・亜・青・天)

☆耳遠き床屋と話す残暑かな

(耳遠きと残暑がよく効いている) (正↓「残暑かな馴染みの床屋の耳遠く」では?)

天牛 (万・五・弘・ゆ・一・允・正)

五点

☆妻来る爽やかな風病室に

忠彦 (紀・恭・五・敏・允)

☆木道をいつしかひとり霧しぐれ

(霧が峰の湿原)

一灯 (万・清・孤・く・天)

☆糶の朝秋刀魚に交はず浜言葉

(☆上五下五どちらか名詞止めにした)

孤舟 (万・清・弘・一・亜)

☆遠雷や寂しき時は手紙書く

規雄 (万・弘・允・正・天)

☆還曆やまだ邯鄲の夢の中

弘子 (堅・弧・五・敏)

海猫(こめ) 眠る沖や烏賊火の一並び

(青…大きな海の景が見える)

一灯 (龍・く・亜・青)

三点

カテールで三途の川から戻る秋

忠彦 (猛・弘・ゆ)

幾たびも花の名を問ひ大花野

孤舟 (五・弘・允)

秋爽の卓ナプキンの帆の高し

全 (恭・弘・二)

☆他人(ひと) 事と聞く疚(やま) しさや大出水

(☆…出水は夏の季語。↓秋出水)

恵洲 (万・猛・恭)

火の絶へし熔鋳炉錆ぶ雁渡

一灯 (允・正・亜)

☆是々非々かちやらんぼらんか猫じやらし

(青…猫じやらしの「ぶれ」が作者の「ぶれ」と響き合う)

正明 (万・紀・青)

風渡る会談教室休暇明け

亜也 (恭・ゆ・く)

二点

新しき帽子で歩く街涼し

そらお (猛・敏)

洪水の山河を照らし月出でぬ

全 (龍・隆)

秋立つや露語始めしと友の文

紀久男 (龍・正)

(正↓「秋立つや露語を始めし友のあり」では?)

二点

被災地の空にありなん今日の月  
秋虹の脚D51の遠汽笛

恭延 (清・弧)  
孤舟 (ゆ・一)

文楽「ひらかな盛衰記」

笹引に拍手大きく良夜かな  
青春を兼題にして獺祭忌

五郎太 (紀・敏)  
全 (く・青)

(青：子規には青春の娛しみが無かった。それを逆手に  
とつての兼題。子規は苦笑いしてるだろう)

☆ 月ひとつ朝に忘るる野分かな  
座禅組む堂の外なる野分かな

弘子 (恭・弧)  
堂哉 (万・敏)  
ゆたか (堅・隆)

かなかなや何を言いたき声しきり

(隆：「を」↓「か」がいいのでは?)

☆ 父と子のゆつくり酒や十三夜

盛雄 (万・青)

(青：羨ましい景。さぞ月が綺麗だったことだろう)  
魂の海癒すかに中秋の名月

全 (紀・弧)

(孤：中秋の名月↓望の月)

一点

窓越しに槿眺めて吸入器  
悲しけき一期の別れ今日の月

清 (天)  
全 (五)

「黙而祈寧」

鎮魂の友の墨痕爽気呼ぶ  
好物は世界最古の実無花果(いちじく)

紀久男 (隆)  
猛 (天)

今日もまた句作を急かす法師蟬

全 (天)

深帽子残暑に重き歩を運ぶ

恭延 (紀)

病室で歳時記捲る昼の秋

忠彦 (隆)

颱風来篠笛の音甲(かん)に上げ

五郎太 (垂)

秋暑しただ寄する波眺め居て

全 (ゆ)

筋雲に秋の来たるを見付けたし

全 (龍)

被災地の南部煎餅つくつくし

弘子 (天)

☆ 川柳の選句して去ぬ生姜市

全 (万)

☆ 高々と銀座の稲架へ酒の米

全 (万)

快男子いま鬱と聞く秋の風

健介 (隆)

悟りとは所詮無縁のサンマ食ふ

恵洲 (堅)

コスモスや揺れる心に風強し

ゆたか (堅)

稲の香にむせびつつ思う放射能

全 (清)

虫の音の絶へてすさまじ風の声

全 (清)

月影にかざす琥珀の洋酒壺

一灯 (堅)

明月や光の風の心地良く

正明 (堅)

ビル街に孤独死を待つ秋の蟬

昇 (正)

名月や意外に明かし節電道路

和夫 (紀)

廃止さるバス停過(よぎ)りてあきつ飛ぶ

亜也 (正)

(正↓「運行の止まるバス停あきつ飛ぶ」では?)

ふるふきの白無花果の身くれなゐに

全 (紀)

象彦のお重でおはぎ秋彼岸

天牛 (垂)

●次回青葉会

十月二十七日(木) 午後六時〜九時 コンチエルト「談話室」

十一月二十四日(木) 全

▲当季雑詠各自五句。投句二句

以上 文責 紀久男

平成二十三年九月旬会報

一、今回は万里子先生以下12名出席。投句は10名。  
先生お手製の栗と枝豆入り握り飯(旨い!)を御馳走になり乍ら開始。ご覧のように一灯さん堂哉さん天牛さんが高得点。久しぶり出席の孤舟さん、無事退院され、養生中の忠彦さんも好成績でした。忠彦さんは十一月旬会に復帰される見通しで、その間のワープロは隆さんにお願しております。

二、関係者近詠

三鷹国立天文台にて五句

初蟬や大正の木の天文台	万里子	山からも津波襲いし野分かな	健介
子午環へ通ふ緑風日本晴	全	朝日俳壇9月26日 金子兜太選	
蟬閑か吾と同齢の天文台	全	修羅の身を闇に浸して薪能	盛雄
蔓草を纏ふ山百合古塔寂び	全	村ぐるみ故郷去る日山背吹く	全
地震疲れ解く萬緑の天文台	全	不整脈いつしか消えて昼寝覚	全
朝の蟬お腹空いたと目覚むる児	眞希子	目に見えぬものこそ怖し蟻地獄	全
うつすらと徹て不在を責められて	全	以上「季流」10月号	
日めくり「今日を生きよ」と蝸牛	全	秋灯下ロシア語発音(はいん)あな難(かた)し	龍平
還暦を迎へし朝柿若葉	弘子	書いてこそ秋も深まれロシア文字	全
母の忌の夏のお服の軽きこと	全	伎芸天秋日のごとく笑み給ふ	允章
炎昼や仁左衛門なら会ひにゆく	全	雲の上に育ちそめたる鱗雲	全
蝸の一声句座を席捲す	全	傍らに居るひとが居て良夜なる	青史
炎昼や己が歩影の自虐感	全	陸奥壊るかたや大和は台風禍	健介
街路樹の茂りの中や小教会	恭延	台風待つ戸締りのほか術(ま)もなく	恵洲
土用波鰻の一生千尋越え	全	堂内を小僧小走り盂蘭盆会	堂哉
竹林や耳を澄ませば仏法僧	和夫	花粉症ゴーグルをして秋刀魚焼く	昇隆
帰省へのみどりの窓口なまり気味	全	亡き父の夢に会ひたる彼岸花	
三鷹天文台	忠彦	秋うらら播磨屋一門志気上がる	紀久男
ゴーチエ子午環砲車と紛ふ炎天下	紀久男		

以上「萬緑十月号」

三、新聞紙面より(芝居と落語)

イ 若手売れつ子の亀治郎(35)が四代目猿之助を来年六月襲名。当代猿之助(71)は二代目猿翁の名を継ぐ。同時に猿之助と浜木綿子(ゆうこ)の長男の人気俳優香川照之(45)が中車を襲名。9月27日の記者会見で猿之助は「翁の文字身に沿うまでは生き抜かん」と書いた色紙を胸に掲げていた。(28日の朝日)これは初代猿翁の「翁の文字まだ身にそはず衣がへ」をもじったものです。

ロ 「歌舞伎十八番」を定めた江戸歌舞伎を代表する名優「七代目團十郎展」が早大演劇博物館で11月13日まで開催中。正月から師走までを句に詠んだ屏風には「白猿」の俳号も。例えば11月は「顔見世や素袍(すおう)も柿の下手若衆」とある。(10月5日の日経)9月26日の現團十郎の講演は立ち見も出る満員だった由。

ハ 10月1日の日経「春秋」は10年前急逝した志ん朝の思い出を紹介、寂しがっている。毎年10月「志ん朝一門会」が日暮里サニーホールであり、今年は13日(木)志ん馬が初めてトリを勤めます。志ん生、志ん朝一門の後継者と目される志ん輔はNHKの俳句番組に時々出ております。

平成二十三年十月九日

紀久男 記